

1 抗 G+C を保有した一例

2
3 ○志水基起 長谷川浩子 山本浩子 伊藤道博 井関徹
4 (千葉大学医学部附属病院輸血部)

5
6 【目的】抗 G とは D 抗原と C 抗原とに共通するエピ
7 トープに対する抗体であるが、今回、抗 G に加え抗
8 C を保有した症例を経験したので報告する。【症例】
9 症例は 72 才女性、輸血歴不明、分娩歴 2 回、第 1
10 子は強黄疸により交換輸血を実施、第 2 子は死産、
11 2011 年 3 月 25 日に卵巣癌の疑いで当院を受診した。
12 来院時検査結果:B 型 RhD(-)、不規則抗体スクリーニ
13ング陽性、同定により、抗 G もしくは抗 D+C の存在
14を伺わせる結果となり、判別のため吸着解離試験を
15実施した。【方法】患者血漿と 0 型 R2R2 赤血球を混
16和後、37℃30 分静置、遠心分離し得た上清を吸着済
17み血漿(上清①)とし、吸着済み赤血球は、DT 解離
18を実施し、解離液①とした。その後、上清①を同血
19球にて 4℃一晩、更にその上清をブロメリン処理後
20同血球で 37℃15 分と計 3 回の吸着操作を行い、それ
21ぞれ上清②、③とした。【結果】解離液①は、R2R2
22血球で吸着したにも関わらず抗 D+C 反応性を示し、
23抗 G の存在が示唆された。また、上清③では、抗 D
24反応性が陰性化したのに対し、抗 C 反応性は残存し
25ていた。更に、処理前と上清③の抗体価を比較する
26と抗 D は x1024 から x1 未満へ、抗 C は x16 から x1
27と低下していた。【考察】抗 D+C の反応性を有する患
28者血漿を 0 型 R2R2 赤血球を用いて吸着解離試験を実
29施したにも関わらず、解離液は抗 D に加え抗 C の反
30応性を示したことから抗 G であると考えた。吸着前
31後の抗体価では、抗 D は吸着前 x1024 が陰性化して
32いたのに対し、抗 C は x16 から x1 へと低下したもの
33の、その反応性が残存したことにより抗 G に加え抗
34C も存在しているものと考えた。吸着解離試験を実
35施することで、通常の抗体同定では抗 D+C か抗 G と
36される本症例は、抗 G+C であることが証明可能とな
37った。本試験は、複数の不規則抗体が混在している
38症例において、その抗体種の判別に非常に有用な方
39法と考えた。(Tel:043-226-2479)